台所はひきうけた
勝立に労商共闘が誕生

企反闘争、賃金闘争の長期化に対応して、各地域ではそれぞれ地域闘争本部を設けて、闘い抜く態勢を固めているが、長期闘争になるとまず台所が心配になる。こういうなかで、勝立地区では労商共闘会議がもうけられ、労働者と商店が闘い通じて一層結びつき、お互いに助け合つて闘いを勝抜く意気を示している。一方、労商提携をさけぶ大牟田、荒尾の革新商店連盟では、十一、十三の両日、ニュースカーを市内に繰出して市民や商店に闘いの支援をつよく訴えるなど、企闘を中心に労商提携の実は一段と結実されつつある。

勝立地区すなわち天道地域連合協議会では、闘いがいよいよ実力行使に入り、長期化の様相をおびてきたので台所を守り、財布のひもを締めて闘いに立上ることとなつた。まず、新学期を控えているために学用品などに親として頭を痛めていることを知り、革商連へこの件を相談したのをキツカケに、こんな苦しい闘いをするときこそ働くものと、商店とが話合いをする必要があると、ここに初の共闘会議が誕生したのである。

二月二十六日にこうして第一回の会議がひらかれるにいたつた。地連協の分会長の方から、こんどの闘いの性格や、こんどの情況を詳しく説明したあと、商店側から分会に対する希望や、分会から商店に対する希望などがザツクバランに出しあわれ話合いがつづけられていつた。

この会議は、こんどは定期的にもたれるほか、両者のあいだには連絡員をもうけて、緊急事態の発生したときは、情況に応じて会議をひらき、お互いに協力しあいながら闘う態勢を一歩も崩さないで勝抜くまで頑張ることが誓われ、協力態勢は確立したのである。

（上）四山県境で市民に訴える革商連情宣隊　（下）勝立地区の共闘店

学用品の掛売り

共闘会議では入学、進学を目前に控えているので、学用品の購入が急務の問題だと検討した結果、三千円までを限度として、スト期間中は掛売りとし、スト終了後正常な給料を貰いはじめてから五回払いでこの金額を回収することが確認しあわれた。

なお、闘いの推移によつては、日用品の掛売などもかんがえられており、ここにおいて同地連協としては、台所は引受けたという強力な態勢ができあがつた。

同地区革商連は五十一店、地連協の申入れについては支部総合ではかられたが、お互いにやろうと、全加盟店の総意で決定したほどであり、四日の地域決起大会では革商連の方から共闘のメツセージがおくられるなど、たくましい闘争態勢をきづきあげている。なお、将来は天道地区だけでなしに、この会議を笹原、玉川まで拡げようとの計画もたてられている。

これについて革商連勝立支部の今里支部長はつぎのように語つていた。

共闘会議ができたことはこの地区としては当然なことです。べつに共闘会議ができたからどうこういうことではなく、つね日ごろからお互いに協力しています。これが形として今回できただけです。こういうものが各地区でどしどしできれば、こんどの闘争や、来月にひかえている一方、大牟田、荒尾両革商連では闘争の熾烈化が予想されるとともに、まず市民や商店に闘いの実態を知つてもらうことが闘いを有利に展開することだと、十一、十三の両日街頭に進出した。

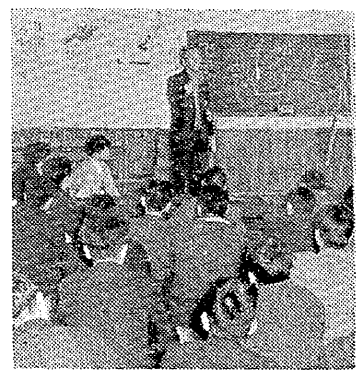
十一日は荒尾市、十三日は大牟田市とわけ、両地区革商連の三役はじめ、正副支部長十数名がニュースカーに分乗して、闘いの支援を市民に訴えた。「市民の皆様と手を握りあつて労働者を推し、三井の悪質な企業整備案を白紙撤回させましよう」と訴える一方、合理化案を説明し、会社の意図するものを具体的にのべて、労働者の栄えることによつてのみ、大牟田、荒尾は栄え、平和な都市になることを訴えて、協力をよびかけた。

交流情宣續く

宮浦、大平を皮切りに開く

昨年からひきつづきおこなわれている交流情宣は第一次を完了、第二次を三月二日から四山支部宮内大平、山玖を皮切りに展開された。五、六、七日と連続三川支部を対象に情宣がつづけられ、十一日宮浦、港務。十四日宮浦、四山支部とそれぞれ、第一次の交流情宣のメンバーでつづけられている。

第一次情宣のときとちがい、すでに闘いは実力行使の段階に入つているし、情宣にきき入る組合員も主婦も、情宣をおこなう各支部長本部執行委員もしだいに熱が入つてくる。



写真は情宣をする灰原書記長

スト実施中とあつて地域の会場には組合員がぞくぞくとつめかけてくる。みな中央団交の情況を見守つているが、緊迫した表情はみられない日を追うにつれて闘争意欲は高まつており、情宣を重ねるにつれて、自信も一層ふかまつてきたようである。

既得権を守り抜け
ローダー分会（三川）の斗争つづく

三川支部ローダー分会（第三十二分会）では、既得権防衛委員会を結成して、昨年から分会既得権の集約をおこない、要求を会社に提出、交渉に全員が一体となつて体当りをおこなつている。あくまでも既得権の闘いであり、それ故に一歩も引かれないと全員が固い結束をもつてさいごまで闘う意欲にもえている。

連日交渉つづく

三川支部ローダー分会では昨年末から討議していた職場の既得権を集約した十三項目と、前回の職場要求の未解決事項を含めた、十四項目について今年にはいるや一月二十六日に要求書を提出、翌二十七日から第一回交渉をはじめた。分会で集約したのは、(1)特殊ピツクの取替えは従来どおり週二回の取替えにすること。(2)カツターの公休仕業による手入れの人員が少くなつているので、従来どおり一台に二名以上配役すること。(3)重量物運搬はのみ台車にて運搬するよう、などの十三項目、これに前回からの未解決である残業による給油、手入れの賃金についての計十四項目である。交渉は第一回に引つづき二月にはいるや二、三、六、八、十五日と精力的につづき第一回で十項目は解決したものの残り四項目について対立をみたまま、事態は一向に進展せず、会社からは問題の焦点をボカした回答がある程度でついに決裂した。八日には三十二分会の決起大会をひらき、これに対して採炭分会から支援態勢確立の支援に進展していつた。

採炭分会も支援

とくに二月十五日の交渉では、一番方が〝交渉もて〟と職制にデモをおこない、このときの職制の態度が組合員を怒らせ、一番方が昇

選挙闘争にも大きなプラスになる
闘争支援訴える
革商連街頭へ進出

三川支部ローダー分会（第三十二分会）では、既得権防衛委員会を結成して、昨年から分会既得権の集約をおこない、要求を会社に提出、交渉に全員が一体となつて体当りをおこなつている。あくまでも既得権の闘いであり、それ故に一歩も引かれないと全員が固い結束をもつてさいごまで闘う意欲にもえている。

撤回 再建案を可決す
大牟田では多数で否決

〔荒尾〕

労働者の繁栄なしには市政の発展はのぞめない。三井鉱山の企業整備案は労働都市大牟田、荒尾の両市では成り行きが注目されているが、十二日荒尾市、十四日には大牟田市議会に革新議員団から緊急動議として、再建案の白紙撤回の決議を提案した。

提案の結果は荒尾市議会では賛成多数で採択可決、一方大牟田市議会では、会社議員らが中心となつて市政より会社の為だとばかり、多数をたのんで市民の願いである同提案を葬り去つた。

荒尾ではこのため会社の方に議会の意思として抗議に行くとともに本社には撤回要求の電報で市議会の意思をつたえることになつた。

なお、大牟田市議会でのこんどのこのやり方に対しては、こんどは対外情宣をおこない、市民に訴えることもかんがえられている。

私達はこれをみても、こんどの選挙には必ず勝ち抜かねばならない抗争のまま、応援にかけつけるなど闘いは大きな盛上りのなかでおこなわれた。

この日執行部がなかに入り話合いをつづけた結果、二十日に交渉をもつことがきまり座込みも解散した。

二十日の交渉でも会社は肝心な点になると逃げる状態で、一歩も前進しない。ちようど一番方、第一番のデモがおこなわれたが、デモ隊の音をきくや係長はスツクと立上り「大衆の圧力のもとでは交渉はもてません」と退場、これ幸いと逃げ出した。神労働部長がついに職員クラブでみつけ出し、再度交渉をもつように話合つた。

この間、ふたたびタクシーで逃走する一幕もあつたが、副長と執行部との話合いの結果、二十一日に交渉をひらくことになつた。こうして交渉はなおもつづけられ、この日は徹宵にまでなり、分会では大衆動員をして交渉をみまもるなかでおこなわれたが、人員は減少させないと確約はとつたが、本質的な問題は進展をみられず、分会ではあくまでこれらの項目は分会の既得権であり、さいごまで闘うと、闘争をもりあげている。

いど、この交渉はつづけられているが、ちようど企業整備反対闘争に闘いはうつり、まだ解決の見とうしにはなつていないが、全分会員が〝団結〟と記した赤い腕章を着用して、いかなる場合でも動員態勢を組むことができるような態勢下にあり、一日一日と闘争意欲をもりあげて闘つている。

怪しげな弁当

不知火校区の某婦人会が、大牟田のM工場に見学に行つたところが、非常に丁重に案内したうえ弁当までだしたそうナ。ソシテ偉い（？）人がうやうやしく頭をさげて挨拶をしたので、一同まつたく会社の幹部というものは親切であると理解したがナントその偉い人とは今度大牟田の市議会議員候補として会社側より出る人で、もちろん弁当も会社からカネをだしたものであることはいうまでもない。

ソンナ弁当たべていると、あと腹がせきますソ。

何が再建だ

汚職の親玉、土屋親分の奥さんが三池にのりこんできて、会社の部課長婦人と港クラブで会食としやれこんだのを、わが方の組合員から発見された。しかも送り迎えのハイヤーときている。

どうせ会社がカネをだしていることだろうが〝赤字だ！再建案だ！〟と労働者ばかりにシワヨセをして、港クラブや各クラブで金をつかつてうまいものたべているとはまつたくアキレはてた行為で、これじや再建にも努力できぬし、選挙闘争もマケラレマセン。

ソロバンを知らぬ

会社は企業整備の一案としてI・B・Mで賃金計算をしていたが、これを手計算にもどすと説明している。

マツタク会社の幹部の頭はどうかしている。アメリカにわざわざ高い権利金を払つて、組合の反対もおしきり流行の機械化をしたが、やはりソロバンがよいとおつしやる。

マツタク、ソロバン（商法）を知らぬトボケ経営者といいたい。

各職場へ擴げたい
宮浦12分会の学習盛ん

宮浦支部第十二分会（測量、採鉱仕繰、企画、調査、鉱山学校）での職場学習はふるく、二十九年ごろからはじめた「読書会」いらい研究会、学習会などをへて、一時中断の状態にありながらもつづけられてきた。

再建案問題をめぐつて同分会での学習活動は高まり、まずことしに入るや一月七日に第一回の講座をもうけ、二月に入ると二十四日に第二回をひらいた。

職場分会としてもうけているこの種の学習活動は、三鉱でも珍らしい存在であり、同分会員が強力な理論を身につけ、日常活動をおこすうえに大きなウエイトをしめしている。

まず、第一回の学習では再建案がとやかくいわれている時期であり合理化案がでるという噂で職場のなかでは、どうなるものかと心配されていた。分会ではこれを察知して、すかさず天野先生を講師として招き「会社の赤字宣伝の本質について」をテーマに講座をひらいた。これで分会員の間にあつた不安もふつとび、いかに会社の宣伝が悪らつなものかを十分とらえることができた。これは、このあと合理化案が出たときにみせた分会員のゆるがぬ自信へと変つたことで十分うかがえる。

こうして、つぎには大牟田平和委員会の多田隈博之氏を講師として「労働者階級と平和運動について」の第二回目の講座をひらき安保条約の問題をとりあげて、これをどう平和の闘いとして取組むかを研究した。

この分会での学習のはじまりは読書会で、はじめは組合関係の書籍を持ちよつて交換し、討議していた。しだいに他の職場からも入つてきた。社会科学の基礎講座へ移つていつたが、分会だけで実施するのはもつたいないと組合に取上げてもらい、定期的にひらかれるようになつた。このため、分会のは一時解散したが、活動家たちが集り、多くの職場活動家をつくろうとこんどは「学習の友」をテキストに研究会をひらき、つづけられてきたが、多くの人を対象にした学習会も必要だと、今年に入るや分会学習会がもたれるようになつたわけである。分会ではできるだけ金がかからぬ枠内でやるためにいろいろ苦心している。

前田分会長談　他の分会でもどしどしこういう学習会を取上げてもらい、全職場に拡まつていくことを希望しています。そうなれば組合の底力も強まり階級的にもたくましくなることでしよう。みんな熟心でよく出席してもらつている。とにかく非常に有意義であり、もつとひろまることが願いです。

分会員のAさん　学習というとむつかしい気がして、出席もさいしよはためらいがちでしたが、この前出席してみて話をきいたら、とてもためになつた。いままでは全然関心もなかつたことが、知るとともに関心も出てきて、こんどの学習にも期待をもつてきにきた。折角こんな会がもたれているので、できるだけ沢山の人が参加されると大きな力になることでしよう。

知らんぷり